

特218

538

速記術研究會編

實用

速記術獨習自在

發兌 中央速記研究會



始





特218  
538

速記術研究會編

實用  
速記術獨習自在



發兌中央速記研究會



目次

速記術の用途……………一  
學習者の資格……………二  
用具並に其使用法……………三  
學習の順序方法……………五  
技術者の通用語……………一〇  
符號の類別……………一二  
符號の原形及び割出し方……………一五  
單符號……………一六  
濁音の書き方……………二一  
鼻音の書方……………二五  
數字の速記法……………二七



數字の記符號……………	二八
ア)行に於ける應用例……………	三一
(カ)行に於ける應用例……………	三一
(サ)行に於ける應用例……………	三二
(タ)行に於ける應用例……………	三二
(カ)行に於ける應用例……………	三三
基本文字應用例一……………	三四
動詞符號の組織……………	三五
略記符號……………	三七
略記號の應用……………	四〇
記事符號……………	四二
目次終……………	

## 速記術の用途

我邦にては最初埼玉群馬等二三の縣會に採用せられ、又落語等に應用せしに止りしも明治二十三年に帝國議會に採用せられし以來、俄然として聲價を高め、爾後新聞通信著述講演裁判會議電話等各種の方面に應用せられ業務の多忙なる、眞に驚くべきものあり。随つて實務者の養成は目下の急務となり、將來の發展は更に低止する處を知らざるに至らんとす。

今や斯術の出版界に於けるは、恰も工業界に於ける動力の如し。殊に電話の通信に應用するや、經濟的に其妙用を發揮し、之なくしては到底新聞社の成立を疑はるゝに至り、又著書の如きも斯術應用の結果遂に口語體ならでは實行上悪しき奇況を呈せるに至る。是皆時勢の進歩に外ならずと雖も、要するに斯術本來の面目が國運を助長すべき所以正に此にあるなり。



## 學習者の資格

從來斯術の真相を解せず又其方式の能否を辨へずして、輕々に學習せる者は往々半途退學、若くは不成功に終るの不幸を見る。斯かる結果を豫防せんが爲めには、茲に學習者の資格を一言するも、極めて切要のことならんか。

常識 世には技術の多くを天才に一任するものなきにあらざれ共、速記術の如きは、斯かる天才を要求する代りに、常識の發達せる者を第一條件とするべし。

常識の發動は人の言語舉動を注意するに依りて、斯術の真相を發揮するを得べし。常識なき人は唯筆力のみ養ひ得るとも、實務に當りて決して成功せざるものなり。

學力 世には常識のみにて辨し得べき業務も少からず。左れど斯術の如きは最多くの學力を要するが故に、最も素養の必要を認む。唯々將來斯術の分業的關心を顧慮すれば、必ずしも萬學に通曉せざる可らずと言ふにはあらざるも、概して國漢文の知識と科學の熟語

並に通用語を取扱ひ得べき素養とを要求す。少くとも現今の中學卒業程度の者にして、初て其資格を適認すべし。尤も從來とても僅かに小學校を卒へたる者にて、成功せし者なきにあらざるも尙は其者の苦學と經驗と時勢の投合とに歸すべきものなるを以て、斯かる境遇に在つて尙且學習せんとする者は、豫め異常の苦修を積むの覺悟を要すと知るべし。

人格 常識あり、學力ありとも、病的身體にて意志薄弱、國民的道義の觀念なき者は、斯術の大成を期し難く結局失敗すべきものなれば、寧ろ初より學ばざるを可とす。何となれば斯かる人格なき者の技術に携はるは自身の不幸のみならず、又世の禍なればなり。而して之を實驗に徴するも大多數は身體健全にして、勇氣に富み、殊に國民的道義に厚き者にして、初て能く斯術を修得し、活用するの事實を證明し得るなり。

## 用具並に其使用法

習字帳 符號の字形を學習するには、洋紙の手帳に一種の點線を施したるものを用ゆ



箇は符號の位置、方向、角度、大小等を正確に記憶するに便せるものなり。

譜記用カード 符號の譜記を助る爲め、縦横各一寸位の方形紙を製り、表面に符號を記し、裏面に譯字を記し置き、日常携帯して隨時之を利用すべし。

演習帳 符號の綴方を演習するには、一冊の駿河半紙を折曲げて中央にて綴ぢたる縦四寸横六寸程の手帳を用ゆべし。此手帳は紙の表裏共使用し得るを以て、一度表面を使用し終へたる時は、更に裏返して之を使用すべし。

罫紙 速度演習の際は、特に十行二十字詰の普通罫紙を若干携帯すべし。箇は一分間何字の速度にして反文上に何程の誤脱ありや等を調査するに便なればなり。

鉛筆 鉛筆は材質軟かにして、餘り脆からざる墨色の鮮明なる物多く使用せらる。

例へば、S印BBの月印 Commercial 印の類なり。此外内國産の良品あれば、互用するも妨げず。而して鉛筆の削方は、凡そ三分程も心を露はし五本乃至、十本位を袋若くは函の鉛筆入に藏め置くべし。鉛筆に唾液を濡はす時は、兎角折れ易きの患あり、慎むべし。

其他小刀錐開明墨毛筆等適宜用意し置くを可なりとす。

### 學習の順序方法

譜記 最初は覺へたる符號を譜熟すべし。符號は全部異様の文筆より成れるが故に、學習者は一日平均五乃至十字位を譜記するに止むべし。一時に多くを貪る可らず。

連接。一符號と多符號とを連接する時は、努めて簡捷の路を取る様に注意し、必ずしも一體に拘泥せず、所謂融通の利く綴方を旨とすべし。例へば符號の正用變用の場合等はなり。

速度 既に符號を譜記し、又其連接を理解したる上は一意速度に全力を傾くべし。速記術の要は迅速なる發言を記すに在り。方式の研究のみにて満足すべきものにあらざればなり。速度の加はるや、概して字形粗大の不利を致すべし。故に運筆の曲折に細密の注意を拂ひて假にも放逸に流れざる様心掛くべし。



反文 符號にて速記せしものを更に普通の文字にて反文する事は速記者に取つて最大要務なり。音樂の如きは固より手練の技術には相違きも速記術の如く二重の勞力を要するものにあらず。斯術の最困難事たる所以は單に屏練のみにては事足らずして、別に文字知識の之に伴はざるものにあるに依る。常に學力の缺乏せる者は、反文の際誤記脱漏等ありて遂に完全なる記録を成すを得ず。世間記記術の入り易くして達し難きを説く所以、全く此に存す。努めざる可けんや。

以上譜記連接速度反文の四綱は斯術學習の順序を示したるものなるが、更に其方法に入りて次の事項を心得べし。

綴字の様式 符號は習字帳演習帳とも歐文綴りの如く、紙面の上方より右へ横行に綴るべし。綴字の途中にて一語句の未だ全らざるに紙面の盡んどせる時は、成る可く語と語との間を密接にするか、然らざれば、字形を幾分か、短縮して其一綴を全うする様心掛くべし。

何となれば、前項の語の半、若くは互爾乎波等を次頁に跨らしむる如きは、往々誤讀誤譯の虞あればなり。

坐席と光線 記記の際には日光竝に燈光を左方より受くる様、坐席を占め又發言者の音を聲を己が左耳にて受くる様に注意すべし。箇は手暗を避け又傾聽の際、右手に障礙なかしめんが爲なり。

記憶の心理 學生の多くはマとナ( )ハとラ( )を誤ることあり。予は教授の際米人グレック(J. R. Gregg)氏の記憶法【Mnemonics】を應用してマを満月ナを鍋ハを剪刀ラを洋燈と聯想せしめしに、忽ち記憶を回復したりき。本書の方式が反音(ハ)詰音交又(+)重音を波状(〽)にて現はし、其他長音を長目に濁音を太目に記するが如きは皆此聯想法に基けるものなり。

單獨練習 習字帳に記入終りし後は演習帳を用ゐて演習すべし。單獨練習の際には凡上に口語體の讀物を擴げ置き夫れを音讀若くは默讀しつゝ演習帳に速記し後讀物を伏せて反



交を爲し終つて復た兩者を對照して誤脱の箇所を訂正し、緩徐より急速に漸進すべきものとす。

**共同練習** 教師若くは同學者を得たる時は一人を讀手とし、他は皆書手となり、相互一定時間口語體(時としては文語體)の讀物を朗讀して演習帳に速記し、一定時間に反文を終へしめ後或は教師に校訂を乞ひ、或は相互的に原文に對照して誤脱の點檢を爲し時に競技獎勵を行ふを可とす。

朗讀の句切 學習日淺き者は徐讀法例へば

能ある―鷹は―瓜を―隠す。

田舎の―人は―律義―正直で―あつて―小兒の―如くで―あります。

の如く讀むべし。而して漸く熟するに及んでは

能ある鷹は―瓜を隠す。

田舎の人は―律義正直であつて―小兒の如くであります。

と讀むべし。而して筆力自在の者に對しては句切なく一氣呵成に連讀するも固より妨げざる所なり。

**練習時間** 日課としては人々の事情一樣ならずと雖も、概して單獨練習は三時間以内共同練習は一時間半以上を練習時間に充つべきものとす。

**假名遣** 速記の際には普通の字音假名遣の書方に依らずして唯々發音の儘に寫すを要す例へば

コ―の長音符號一つにてカウ(高)カフ(甲)カウ(功)コフ(乞)等あらゆる同音語を寫すべく又アローシヨ―等の長音符號にて有らう。啞聲。使用。枝葉。私用。市用。飼養。等各般の同音語に適用すべし。此際毫もアラウ。アラフ。アロウ。アロフ。シヤウ。シヨウ。シヨフ。等字音假名を顧慮すべからず。尤も反文の際に臨んでは當然字音假名遣法に依り、明確なる熟字を擇んで之を當嵌むべきものと知るべし。

**熟語點取會** 符號練習の外反文上殊に著しく効果を奏するものは普通熟字の點取會なり



例へば数名共同し、一人司會者となり、下の如き作業を課す。

五分間に木扁の文字を知り得る限り多く記せよ。十分間にカンカと云へる熟字を知り得る限り多く記せよ。

時間の到着するや一齊に筆を停めしめ、其成績を考査して最多數正確に記載を爲せし者を甲とし、次第に乙丙と點付を爲し數回の競技の後優者に賞品を與ふる等相當の方法あるべし。目下國漢文の常識低下せりと稱せらるゝ普通教育に取りても是等は最適好の獎勵法ならんか。

其他國訛りの研究。新聞雜誌の熟讀。外國語の學習等直接間接に斯術に補ひあるものは構へて怠る可らざるものなり。

### 技術者の通用語

速記術は。技術を指す語なれども今は學科の名稱に轉用せり。

速記者(又は寫言士)。斯術に依つて生活する人を指す。

符號(又は速記文字)斯術の方式に基ける記號を指す。

原稿(又は速記帳)符號にて記録したる用紙を指す。

反文(又は翻譯)原稿より普通文に書直すことなれども時あつて其反文したる書類をも併稱す。

速記料 速記者に對する一切の報酬金を指す。時としては速記料と反文料とを區別する事あり。

讀合せ 二人以上共同して速記せし時、一旦讀合せて後反文する場合に用ゆ。

復演 甲の速記したるものを其儘朗讀して乙をして速記せしめしものを云ふ。

點取り試験 一定時間或速度にて朗讀せしものを速記せしめ反文の上其誤脱の分を一字一點若くは半點等の割合に計算し、其點數の少なきものを優者とす。

誤讀 速記せる符號を讀誤るものを云ふ。



誤譯 速記せる符號を正しく讀み得れ共、譯文の際譯字を誤れるものを云ふ。

正用(正式) 符號を正則に連接することを云ふ。

變用(變體) 符號連接の際臨機活用することを云ふ。

## 符號の類別

前編に於て速記術の何物たるやを領會せる諸子は進んで斯術の内容を學ばざる可らず。既に言へるが如く、人の發言を書寫さんには先づ其發言に對するの符號を學習するを要す。今試みに其符號の種類を示し順序を逐ひて之が解説を爲さんとす。

單符號 一に基本符號と言ふ。例へば英國語の Alphabet 我國語の五十音等の一箇々々に配當すべき符號なり。而して普通假名に於ては母音半音母音父音子音を合せて五十とせりと雖も、斯術に於ては便宜上之を擴充して拗音濁音等を添へ、百四個の符號となせり。是等單符號は後に來る可き各科の符號の基本となりて其使用の範圍最廣きものなれば第一

に之を修得せんことを望む。

變音號 箇々の單符號は其語音の變化に應じて四様の變形を生ず。之を變音符號と言ふ。例へば長音(長く引く音)反音(撥ねる音)詰音(詰る音)疊音(重なる音)の四變音を速記するに方り夫々符號を變形するものにして、此變音は單符號と相待つて初めて速記の第一歩をなすものなれば、最重要の部分に屬す。

表數符號 人の發音中計數に關するものは特別の表數符號を要す。例へば計算を主とする會議統計報告理化學の實習等の場合はなり。

動詞符號 言語の排列上最變化に富み、随つて斯術の應用上最趣味あり、利益多きものは動詞なり。此符號たるや基本符號のみにて書寫し能はざる程の能辯に對しては一種の縮寫的形式に於て優に之を書寫する事を得。故に何人の法式に於ても常に重きを置かるゝ處のものなり。

略記符號 前者の外現時の口語文語中特に頻繁に使用せられ又書寫の煩はしきものに對



しては豫め之が畧法を準備するの要あり。之を略記符號と言ふ。此符號は二箇以上の基本符號を連接すべき場合に或は首尾のみを記し或は之に代用するものにて斯術の運用上効力の極めて多きものなり。而して其數たる殆ど制限し難きが如しと雖も、本書に於ては特に共著しきものを録し置けり。

混成符號 如上の各符號は其符號固有の務の外尙各種混成してより以上の簡捷を圖るの要あり。

例へば表數と動詞と略記とを各々混成して一熟語を書寫する等の場合是なり。是等は從來應用者の手心に一任せしも斯くては往々過誤の生し易き虞あり。故に一體の符號として本書に追加せり。

記事符號 發言の首尾段落を記し又は發言中に起りたる諸般の記事を添へ置くは他日の反交上讀者に感興を與ふること頗る大なり。故に之に對する數箇の符號を準備せり。

### 符號の原形及び割出し方

符號の原形は大小二箇の圓、及び等角を有する四箇の直徑より成る。此原形は名けて小圓大圓と稱す。

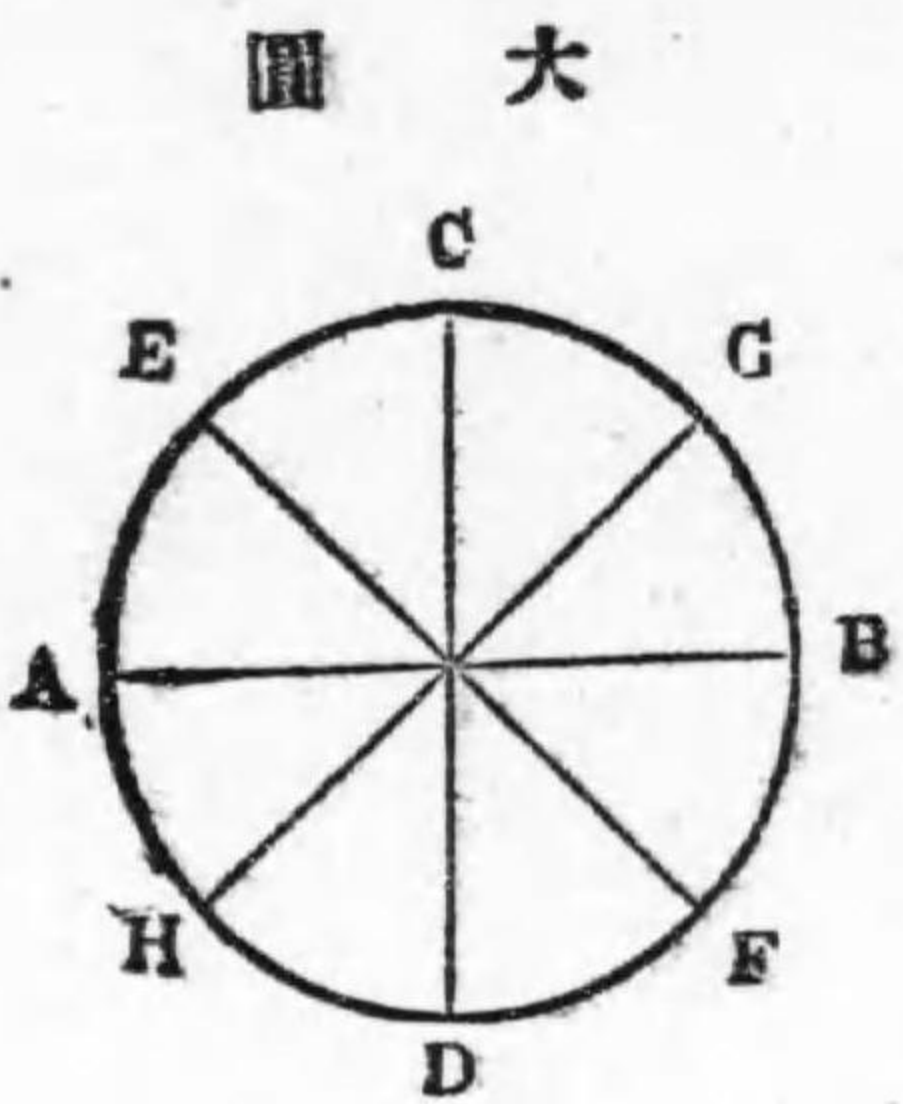


今左に此原形に基き、各種の單符號を分解的に説明せん。  
A 母音及び半母音は小圓の圓周及び其直徑より形成す。





單符號



速記術は人の言語を其のまゝ書寫すものであるから、普通文字に於けるが如く、(イ)も(井)も(エ)も(エ)も(オ)も(ヲ)も區別する必要はない、又(君)はと云ふ時發音は(君ワ)であるからこれも亦(は)を用ひず發音通り(わ)と書くのであつて唯翻譯即普通文字に書き改める際に文法上誤りのない文字を使用すればよいのである、まづ此點をよく理解して置く

必要がある。そして單符號文字は假名の五十音と同様であるが、前にも述べた様に(イ)と(井)の如きは共通に使用するものであるから、(や)行の(イ)と(エ)と(わ)行の(井)ウ(エ)(ヲ)は左に掲ぐる基本文字表に於てはこれを省略する。



基本文字 (二)

ハ ヒ フ ヘ ホ

マ ミ ム メ モ

ヤ ユ ヨ

ラ リ ル レ ロ

ワ

カ

基本文字 (一)

ア イ ウ エ オ

カ キ ク ケ コ

サ シ ス セ ソ

タ チ ツ テ ト

ナ ニ ネ ノ



右に示した基本文字が速記術全体の骨子となつて有ゆる言語文章が組立てらるべきものであるから、先づ第一にこの基本文字をよく記憶して大小長短並に直線弧線を最初から明かに區別して練習して置かぬと取返しの際の弊害を貽すから吳々も細心の注意が必要である、最も文字の大小は各人の適宜であるが、標準が既に割出方に於て定つて居るのであるからこの標準は絶対に動かす事の出来ないものであつて(あ)行即ち母音の倍の大きさがカ、キ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ各行の三段まで例へば(か)行なれば(カ)(キ)(ク)までが(あ)行文字の倍の大きさとなり四段と五段、即ち(か)行の(ケ)(コ)から(ら)行の(レ)(ロ)までは又其倍の大きさとなるのである、要するに(ア)の倍が(カ)(カ)の倍が(コ)(以下同じ)と云ふ順序になるのである、尙右の基本文字の表の中に(ウ)の所に「—」と二つの符號があるが、これは運筆上下、に續く文字との連続に便利のよい方をどちらを使つても差支へないのである、例へば(ウカ)と書く場合は「」と「ウツ」と書く場合は「」と云ふ具合に使い分けをするのである、又直線と孤線に注意を望むのは(カ)と云ふ文字を記す時

遠少し曲ると、「ナ」と紛らはしくなり(ナ)行と(ハ)行と(ラ)行等も傾斜に注意せぬと間が起るから最初から嚴密に區別して練習する必要がある、又初學者の爲めに特に言つて置くが速記文字は歐文の如く左から右に連続するもので、決して日本文字の如く縦に綴つてはいけない。なほ本書中の速記文字其他一切の符號は些か大に失するも之は初學者の爲めに特に文字の標準を示したものであるから實際上大体この位の大きさにて練習すれば宜しい。

### 濁音の書方

濁音と云ふのはガキケゴ、サジズゼゾといふ具合に音の濁つて發せられるのを云ふのであつて(カ、サ、タ、ハ)の各行何れも濁音に變するのであるが、これは普通の文字に於て濁點即ち加點に依て變せしめて居ると同様に速記文字に於ても上部若くは其横に加點するのであるが唯普通文字では二個の小點を打つが速記文字に於ては唯一個の加點によつて



濁音に變ずるのである。

茲で一才注意して置くが、前にも言た通り速記は發音其儘を寫するものであるから清音に於てイと井の區別のないと等しく濁音に於てもズとヅ、ジとチの區別は全然不必要なのである故に、ズとジの方が運筆上便利であるからヅとチの濁音は絶対に使用せぬ方がよい而して濁音文字が二個以上續く場合

濁音の書方

ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ㄱ	ㄱ	ㄱ	ㄱ	ㄱ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ㄱ	ㄱ	ㄱ	ㄱ	ㄱ
ダ			テ	ド
ㄱ			ㄱ	ㄱ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ
ㄱ	ㄱ	ㄱ	ㄱ	ㄱ

濁音文字の應用例

君が代	杉林	是非	儀式
ㄱ	ㄱ	ㄱ	ㄱ



合は個々別々に加點して居ては面倒であるから其連続した各文字の中間に一個の加點をすればよいのである、又普通基本文字と濁音文字が組合されて一つの語句となる時、例へば小使とか、同地とか云ふ場合にコヌと書き直ちに筆を放して其ヌに加點し然る後、あとのカイを書くとき云ふ如く濁音に逢着する毎に其都度一々筆を止めては非常な手数となり、速力を阻害する事が甚だしいから小使ならコヌカイと一句を記し終つて後にヌに加點し、同地なればト子と記し終て後ちトに加點する様最判から習慣を養ふて置かなくてはならぬ初學者に於ては動もすれば普通文字と同じく一々加點し、然るに次の文字を記す習癖があるから特に注意されたいなほ濁點は、地名、人名等固有名詞のものに對して是非とも使し用なければならぬが普通の言語文章に對しては多く其必要を認めないのみか、速力を非常に阻害するから速記の熟達するに従ひなるべく省略乃至全廢する様にし常に其習慣を養ふように心掛ける必要がある。

### 鼻音の書方

鼻音とは即ちンの附く音で普通の文字では獨立の文字として制定され、明かに區別されてあるが、速記に於ては特に文字として定められて居ないのであるが故に、鼻音の書方と云ふよりも現し方と言つた方が適當である。即ちインと云ふ場合にはイの文字の末端を上に向て撥ねる、又ニンと云ふ場合も同様ニの文字の端を撥ねるのであつてこれが爲故らに力を入れてはならぬ、唯軽く筆を撥ねさへすればよい、又せぬとかならぬとか記す場合も鼻音で現して差支ない、なせなればありませんと發音した場合でも普通文字に書現す時はありませぬの方  
が多く用ひられて居るのであつて従つてせぬと明かにぬに力を入れて發音した場合にも、これを記記する際はせんと書取つてよい事となるからである。



鼻音の書方

アン	イン	ウン	エン	オン
㇏	㇏	㇏	㇏	㇏
カン	キン	クン	ケン	コン
㇏	㇏	㇏	㇏	㇏
サン	シン	フン	セン	ソン
㇏	㇏	㇏	㇏	㇏
タン	チン	ツン	テン	トン
㇏	㇏	㇏	㇏	㇏
ナン	ニン	ヌン	ネン	ノン
㇏	㇏	㇏	㇏	㇏

(以下畧ス)

二六

数字の速記法

数字の速記と云ても別に数字其物には變りはないのであるが、唯速記文字の綴り方は歐文と同様横に書くのであるから勢ひ数字もローマ数字を用ひるのが便利である。然し例へば、二億五十七圓と云ふ如き位取の懸隔ある數を突嗟の間に記す場合にローマ数字の正式な配列方ではとても迅速に書取る事は不可能である。されば二億五十七圓と書くには普通れば「200.000.057」と書かなくてはならぬから其位取さへも面喰ふ計りでなく斯の如き數字が數多連續して發せられる時はとても煩雜に堪へずして遂に筆を擲たなければならぬ様な不結果に終るのである故に本記記術に於ては如何に複雑な又如何に位取の困難な數と雖も頗る簡單に記し得る一定の法則と符號が設けられてあるのである。



## 數字速記符號

一萬 二萬 三萬 四萬 五萬 六萬 七萬 八萬 九萬  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

十萬 二十萬 三十萬 四十萬 五十萬 六十萬 七十萬 八十萬 九十萬  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

百萬 二百萬 三百萬 四百萬 五百萬 六百萬 七百萬 八百萬 九百萬  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

一千萬 二千萬 三千萬 四千萬 五千萬 六千萬 七千萬 八千萬 九千萬  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

二九

一億 二億 三億 四億 五億 六億 七億 八億 九億  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

## 數字速記符號

十位 百位 千位 萬位 十萬位 百萬位 千萬位 億位  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

一 二 三 四 五 六 七 八 九  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

十 二十 三十 四十 五十 六十 七十 八十 九十  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

百 二百 三百 四百 五百 六百 七百 八百 九百  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

二八

千 二千 三千 四千 五千 六千 七千 八千 九千  
 ㄥ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ



(ア) 行に於ける應用例

アイ	アエ	アウ	アオ	イエ
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
ウエ	オエ	オエ	エア	ウオ
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ

(カ) 行に於ける應用例

カキ	カク	カケ	カコ	キク
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
キケ	クケ	コク	アカ	アキ
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ

速記術應用例に就いて

速記省略符號左の應用例に就て見られない以上の講述により速記の方則は全部説明し盡したのであつてこれより如何なる言語文章と雖も完全に速記し得るのであるから、反覆熟讀し充分に會得し常に練習を怠らず、尙其欲する所に向つて利用しなければならぬ。



(カ) 行に於ける應用例

アク アケ アコ イケ イク  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

ウク ウケ コイ カイ クイ  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

アカイ カオク カイカ キコク キオク  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

アイキ アオエ ケイキ キカイ カイコ  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

(サ) 行に於ける應用例

コイシ イカス クキイ サイシ キソク  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

カエス カタス カクシ シカク アイス  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

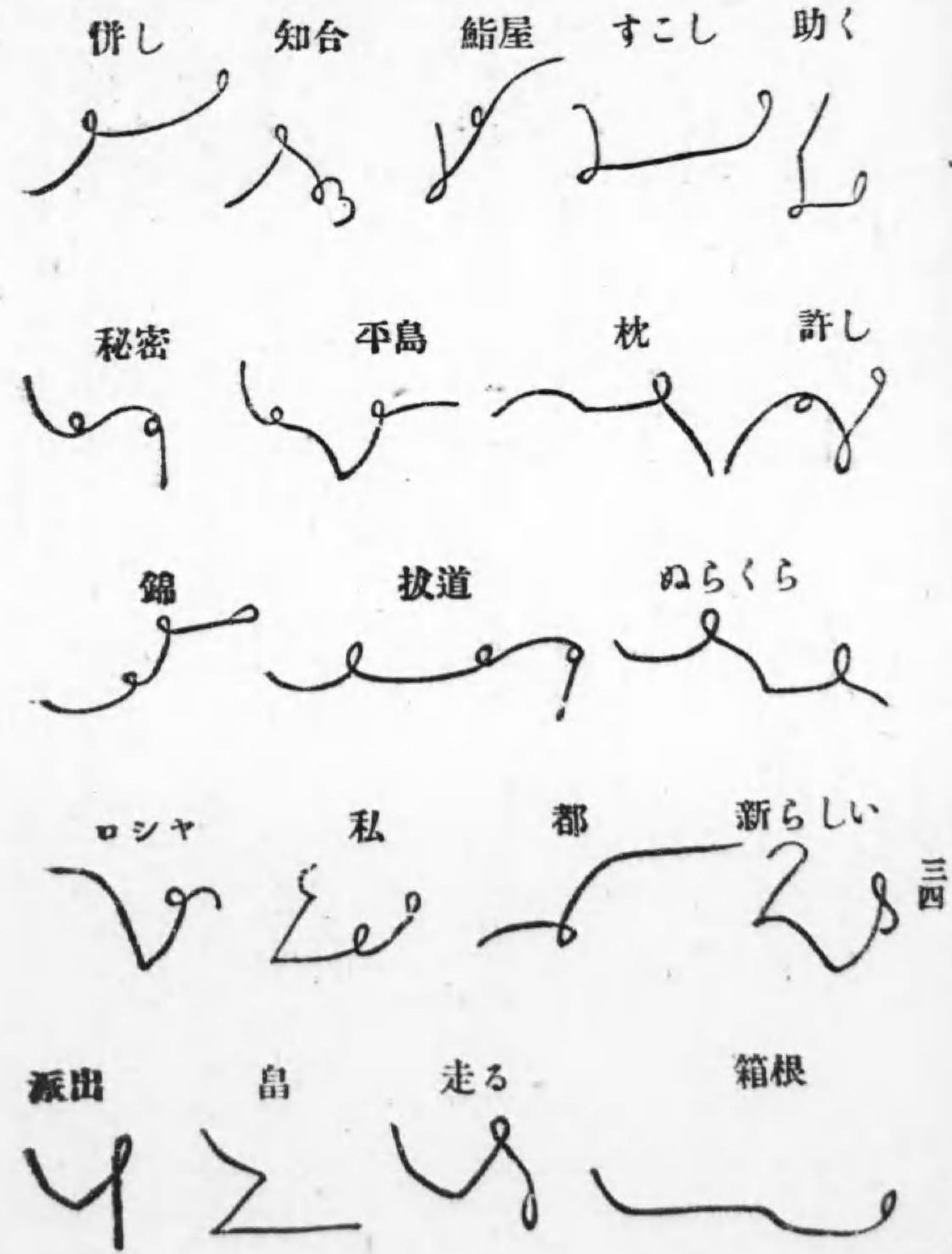
(タ) 行に於ける應用例

タイ タコ タク タチ タキ  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

チク ツケ ツイ サタ サケ  
ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ



基本文字應用例 一



三四

動詞符號の組織

前章に於て略々動詞符號の各分類に於ける觀念を與へたれば進んで其符號の組織を略述すべし。便宜上動詞符號の形狀(積極。消極時法能受を含む)位置(變用を含む)連接の三段に分ちて之を解決せん。

形 狀

動詞符號の原形は五箇の各方面を異にせる短線を基礎として之を他の符號に配當す。之に積極消極の二種あり。消極符號は常に積極符號を打消す形を示すものなり。



速記術に於て略記の簡捷なるは猶丸の急坂に轉し帆の順風に走るがごとし。略記以外の諸符號は固より發言を書寫すに於て欠漏なしと雖も時に其速力の辯舌に伴はざる場合なきと保せず。是に於て乎略記の要あり。略記は其基礎を單符號に取るを原則とすれども間々除外例の存するあり。而して本書收むる所の略記は一般通用語中の最屢遭遇するものに止め各種の專門語に至つては到底此中に網羅する能はず。何となれば醫師には醫師の専門語あり。軍隊には軍隊の専門語あり。乃至工藝美術宗教文學等百般の事皆それぞれの専門語あり。是等は其間々々に於てこそ特殊の略記を作るの要あらんも一般的としては寧ろ煩雜の嫌あればなり。故に各種専門語の略記は他日の研究に誤り茲に單にはアイウエオ順に依りて通用語の略記を列擧する事とせり。

略記符號

積 極

マス    マシタ    マセウ    マシテ    デアリマセウ

消 極

マセヌ    マセヌ    マス    マセヌ    マセヌデア
   
             デシタ    マイ    デシテ    リマセウ

以上の原形に一平線を配當してアリマスなる語の系統に應用す

積 極

アリマス    アリマシタ    アリマセウ    アリマシテ    アルデアリマセウ

消 極

アリマセヌ    アリマセヌ    アリマセヌ    アリマセヌ    アルコトハアリマセヌ

五箇の原形符は更に左の九箇の附屬符號を有す

カラ    ナラバ    ケレドモ    ナレドモ    ノミナラズ

ノデアル    ニモ拘ラズ    ガ    カ



マ 行  
 マサニ 全ク 満足 自ラ 向ツテ

ヤ 行  
 矢張り 約束 動モス 止ムヲ 故ニ  
レバ 得ズ

ラ 行  
 利益 理屈 利害得失 露西亞

ワ 行  
 僅カ 私 分ル 悪イ 忘レル

ア 行  
 アレバ アラズ 或ハ 普ク 強ナ  
 聊カ 苟クモ 著シイ 如何ト 所謂  
ナレバ

カ 行  
 改良 學問 考ヘ 會社 解釋

サ 行  
 少シ 随分 速カニ 須ラク 折角

タ 行  
 直チニ 知識 違フ カ 秩序

ナ 行  
 ナレバ ナガラ 成ル可 行ナレド 成程  
ク モ

ハ 行  
 計リ 早ク 話シ 始メ 果シテ 然ラバ



## 略記號の應用

前章列舉せる略記は著者の經驗上最一般的に屢々遭遇せるものにして、之を應用して種々なる變化に適合せしむるは學習者の本務なり。之に付ては先づ其號を充分に習熟するを要す。之を習熟して實地に應用せんか右に列舉せる略記以外幾多の新號も臨機案出するを得べし。例へばアラス可ラズの如き略記を速記せし上にてアラサル、アラザレバ、可ラサル、可ラザレバ等の語に遭遇するとも必ずや寸時の躊躇なく。之に相當せる新符號を案出して斯術の目的を達すべし。即ち右の場合に於てアラスの略記にルの略符號を添へてアラサルとなし、レバの略符號を添へてアラザレバとなし。可ラスの略記にルの略符號を添へて可ラサルとなしレバの略符號を添へて可ラザレバとなすの類なり。若し又ス可ラズナス可ラズ、有ル可ラズ等の語に遭遇せんか、右の可ラズの略記の前にス、ナス、アルの略符號を加へて之に適用するも固より可なり。又地名人名等にて最多く連用せらるゝ、英

吉利、佛蘭西、獨逸、亞米利加、露西亞、奧地利の如きは一々略記の設けなしとするも前章列舉中の一二例に準據してイの上に横線を添へて英吉利となし、又フの上に横線を加へて、佛蘭西となすも可ならん。随つてオストの上に横線を加へて、奧地利とし、オスタの上に横線を加へて濠太亞利となすは極めて便法ならん。若し又曾て耳にせざる地名の而も長たらしく書き惡き語に遭遇せんか。初度は其發音の儘に書寫すも再三再四續出する場合は、其一二音のみ記して他を略し之に略符の符號を添ゆる様するも妨げず。例へば地理人類學等の講話に亞弗利加のポツテントツト、亞米利加のチエラデルヒューゴ、ナイヤガラ、露西亞のセントベートルスポルク、獨逸のアルサスローレイン、土耳其のコンスタンチノール等の如き續出する時には、ポツテン、チエラ、ナイ、セント、アルサ、コン等の符號を記して其上に横線を添へ置くとも毫も紛はしき虞なし。之と同じく、ナボレオンがナの下に横線を添へて書現はさるゝに準據してワシの下に横線を添へてワシトンとなし、アレの下に横線を添へてアレキサンドルとなすも利あつて害なき所なり。其他特種の



略語、例へばナウ井ゲーション、コンステチューション、コレスポンデントの如き、若くは立憲君主國、列國平和會議等の語に遭遇せんが一旦は正確に其語音の儘を記すべきも再三再四に及んでは臨機、ナビ、コンス、コンス、リ、レ等と記して之に或符標を添へ置くも随意なるべし。要するに千變萬化の語句に對して適宜の略記を案出するは固より斯術の熟練に待つべきものなれども前章の略記は其基礎ともなるべきものなれば努て之が符號を怠らざる様心掛くべき事なり。

### 記事符號

從來速記術書の中には句讀或は感嘆詞と稱して各種の記事符號を羅列し往々にして實用に遠きものすら有りしが本書は多年の經驗上最適切なるもののみを留め他は皆省略に従ふ蓋發言中に起れる複雑なる事項を豫め一定の物と限るは迂の極なればなり。記事符號を分つて十種とす。

發端符は 發言の初りし時を示す。

句讀符は 發言中一語一句の終りを示す。

終了符は 發言全部の終りを示す。

引用符は 句若くは文の引用せしものに付す。

挿入符は 既に書寫したる部分へ追加を示す。

重語符は 前符を重ね來りし時に用ゆ。

例へば金を出せば物が買へる金を出せば物が買へるけれ共、といふ時の後半重語なり。

反語符は 前語を裏返したる時に用ゆ。

例へば金を出せば物が買へる金を出さねば物が買へぬといふ時の後半は反語なり。

存疑符は 發音若くは意義の不明なるを示すものなり。



意事符は 各種の名稱語句の注意を要するものに付す。  
録事符は 議場に生ずる賛否動靜雜件等記録を要する物に用ゆ。  
例へば書記朗讀ヒヤヒヤ、賛成といふが如き場合に付す。

終  
り

昭和三年六月二十日印刷  
昭和三年六月二十五日發行

定價壹圓貳拾錢  
特價金壹圓

著作  
所  
有

著者 速記術研究會  
發行若 齋藤政治郎  
大阪市東區谷町三丁目十七番地  
印刷者 幸松一雄  
大阪市西區阿波座上通三ノ三九

發行所

大阪市東區谷四電停前  
振替大阪七四八一三番

中央速記研究會



終

